

J-EPSでブランド化

パナ・ケミカルが提唱

発泡スチ再生の歴史を未来に

パナ・ケミカル(本社は「悪者」として捉えられる場面が多く、リサイクル廃止論さえささやかれる。しかし、本発の発泡スチロールは生活を支える重要な物であり、熱可塑性プラスチックで溶かせば何度でも生まれ変わるとして再生利用に適した素材。当社が始めて「昨今、プラスチック

チロールの再生をブランドとして打ち出し、プラを「悪者」とする風潮に二石を投じる」と述べている。

同社は1977年から、東京・築地市場で、発泡スチロール製の魚箱を処理機で熱溶解し、インゴット化する独自のリサイクル方式を生み出した。当時はリサイクルという言葉もなく、廃棄魚箱を商社の視点でもつ二度、プラ原料として活用することに取組んだことが始まりだったという。

産業廃棄物として処理費が発生する使用済み発泡スチロールについて、溶解処理機を購入、設置して有価物として買い取りするというスキーム。築地市場

の実績で、溶解インゴット化は全国の魚市場やデパート、スーパーマーケット、廃棄物処理業者へと広がり、リ

サイクルの優等生”とも呼ばれるようになった。同社は現在までに、全国2000社の顧客とともに、40年間で1000万ト以上の発泡スチロールを資源化した。市場の80%、月間回収3000トを支えるマーケットリーダーとして、

輸入規制、08年のリーマンショック、11年の東日本大震災、15年の原油暴落、17年のナシヨナルロードなど、販売ができない時も大量在庫を抱えながらも切り抜けた。

海外では、発泡スチロールは圧縮してリサイクルするのが一般的。熱溶解の発泡スチ再生利用は、日本発の発泡スチロールとして広く知られるようになり、リサイクル処理機は欧米に輸出され、現在では海外でもリサイクルが行われている。さらに、発泡スチのインゴットは国際商品として扱われ、大きな国際資源循環の流れを作っている。



J-EPS recycling
A Japanese Original Since 1977

日本発の発泡スチロール
リサイクル

同社は現在までに、全国2000社の顧客とともに、40年間で1000万ト以上の発泡スチロールを資源化した。市場の80%、月間回収3000トを支えるマーケットリーダーとして、市況が悪い時や96年の中国の輸入禁止、2004年の